

「結節点としての労働者福祉協議会」

中村圭介（東京大学名誉教授）

シンポジウム『共に支え合う連帯社会の構築をめざして』

1. はじめに

2. 連帯社会と4つの助

連帯社会インスティテュートへの転職

「連帯社会とは何か、どうすれば構築できるか」という素朴な疑問

「生活や仕事上で何か問題を抱えて困っている人びと、あるいは生活や仕事の状態をより良い状態に持っていきたいと願う人びとに支援の手を進んで差し伸べる。これが、連帯する社会の姿ではないか。では「支援の手を差し伸べる」主体は誰か？」

4つの助

自助

公助

共助

他助

4つの助を体系的に組み合わせることができれば、より効率的に、より有効な支援が提供できるのではないか。

3. 労福協への関心

連合総研プロジェクト「地域労働運動ルネッサンスー地域に根ざした顔の見える労働運動」（2008年度）で、たまたま出会った労福協（静岡県）

11の労福協調査 全労済協会『連帯社会の可能性』2019年

4. 結節点の可能性

多様性と他助活動

消費生活協同組合、労働金庫、こくみん共済coop・・・他助活動を本来事業として営むことは難しい。

地方連合会、地域協議会は政策制度要請、労働相談・生活相談など他助活動に関わっているけれど、それを中心に据えることは難しい。

NPOは人的、資金的資源に制約がある。

労福協の高い可能性、結節点になるという決断

「人間は生まれながらにして不平等」という現実はどう立ち向かうか

5. 人材育成・・思いつき

「補修的連帯意識」(賀川豊彦)の涵養

労働組合員、消費生協の組合員と職員、労働金庫・こくみん共済 coop の職員、労福協の職員、とりわけ若い人びと

*フードバンクの食料整理の手伝い、労働者教育、消費者教育の担当、防災・減災の行事の実施に積極的に参加してもらおう。

*労働組合、協同組合の研修体系の中に、労福協の歴史と現状、連帯社会の意義を学ぶ機会を設ける。

*他県の労福協の他助活動の実際を見学する。

*NPO や社団法人、財団法人で働く人々との交流を図る、彼らにも労働金庫、こくみん共済 coop の利用者になるよう働きかける。

*労福協の諸会議に若いうちから出席する、また労福協の事務局に短期間出向し、共助と他助の活動の実際を経験する。